

#### 町工場の明日はどっちだ

大阪府松原市市民生活部環境予防課

松本 峻一



松原市は、大阪府のほぼ中央、大阪の2大都市である大阪市と堺市に挟まれるように位置しています。面積16.66 km<sup>2</sup>、人口約12万人の小規模なまちですが、高速道路が多く結節していることから主要都市にアクセスし易く、交通の要衝として重要な役割を担っています。

近年では「安心・安全なまちづくり」に特に力を入れており、平成25年には国内で8番目、大阪では初となる「セーフコミュニティ」の国際認証を取得しました。その後も交通安全・犯罪防止・自殺予防・防災等の持続的な取組みを地域や企業との協働で進めています。

産業面では、金網工業、真珠核製造、印材製造が地場産業として挙げられます。そのうち公害部門との関わりが大きいのは金網工業でしょうか。金網織機は騒音規制法の特定施設「ワイヤーフォーミングマシン」に該当し、昭和40~50年代の届出資料によると、当時は市内で数百基の金網織機の届出がされていたようです。今では工場の数はずいぶん減りましたが、装飾性の高い「デザインメッシュ」や印刷用の「ステンレススクリーンメッシュ」等、高度な技術を武器に活躍を続けている工場もあります。市役所の1階エントランスには市内の金網業者が手掛けた「金網製の壁画」



市役所 1F 金網の壁画

が飾られており、地場産業の可能性と官民協働のシンボルとして親しまれています。

現在も市内で元気に活動する町工場ですが、問題となり易いのがやはり騒音苦情です。数十年前から操業の続く歴史ある工場、その隣に住宅が立地し苦情が発生、測定してみれば基準オーバー、指導に行けば「後から来たくせに」と門前払い、というケースはよくあることですが、私が今回紹介するのは、その中でも特に印象的な事例です。

平成25年5月初夏、住民も工場も窓を開け、苦情が発生しやすい季節のある日のことでした。「隣の工場がうるさい。夜遅くまで作業している」と電話が入り、さっそく現場確認に向かいます。あたりは閑静な住宅地で、神社などもあり騒音とはおよそ無縁な土地に思えたのですが、件の工場に近づいてくると、「ガシャン、プシュー」などと何やら奇妙な物音が聞こえてきます。そうして最後の角を曲がり眼前に広がったものは、私の想像を超えた光景でありました。

それは「町工場群」とでも呼称すべき、小規模工場の集合地帯でした。住宅とさほど変わらぬ広さの狭小な工場が5、6軒立ち並び、唸りを上げる工作機械。隣には住宅が密接しています。住宅

と工場との距離はわずか1 m 程度。塀などもなく建屋は老朽化して隙間だらけ。敷地境界で測定すると 75dB でした。この地域の規制基準が 55dB であることを考えると驚異的な数値です。住民はこの騒音に常時曝されるわけで、なるほどこれでは健全な生活は望めないでしょう。今まで苦情が無かったのが不思議なほどの状況でした。

発生源は、金属部品を切削加工する工場、狭い場内に工作機械 9 基を敷き詰めてフル稼働しておりました。従業員 4 名ほどの、本当に小さな工場です。苦情の旨を伝えれば、返ってくるのはまず困惑。「ウチは 40 年以上前からやっている、隣のほうが後から来た」「隣が住み始めてからも 20 年以上経つ。何故今さら苦情が出るのか」「55dB に下げるなど不可能」等々。それでもまずはやれることから、ということでどうにか説得し、第一の対策として時間短縮と窓の閉鎖が行われましたが、75dB が 70dB になったところで状況に大差はなく、苦情に終わりは見えません。

その後はなかなか進展せず、住民も苛立ち始めたころ、社長がついに決断を下しました。防音壁を建てるというのです。ただし施工するのは専門業者でなく社長の知り合いの工務店。これがいかにもリスクか、騒音公害に関わる方ならご理解いただけるでしょう。当然その懸念は伝えたのですが、専門業者に依頼する資金もないとのことで、イチかバチかでやってもらうことに。

結果的にはこれが功を奏しました。防音・吸音を複合させた四層構造の見事な防音壁が建ち、音圧レベルは 58dB まで低下しました。しかし依然として基準は超過しており、苦情者も効果を認めつつも納得とまではいきません。音に加え基準未満ながら振動もあるというのです。断続的な音や衝撃が延々続くタイプなので、数値以上に生活環境に与える影響は大きいのかもしれません。

社長はその後防振ゴムや機械の一部撤去、配置換えなどの細かい対策を重ねることで少しずつ改善していきました。そうしてついに 55dB 未満での操業が可能になったのです。さらに当事者間でも弁護士を介して和解契約が結ばれ、この問題は解決したかに思われました……が、苦情は今でも続いています。たとえ基準内であろうとも、鳴り止まぬ騒音は今なお生活環境を蝕み続け、住民はすっかり憔悴してしまっています。工場と住民との関係も悪化する一途です。当初から 20dB も低減したのに、いまだ解決の道は見えません。感覚公害とはかくも難しいと痛感させられます。

地方創生が叫ばれる中、町工場や地場産業は、文化振興や雇用創出の点で再評価されています。他方、住環境の変化に対応できず、苦情や近隣トラブルを引き起こしてしまうケースも多く、そのような場合は双方に切実な思いがあり、どちらの言い分もよく理解できるのです。そして、公害担当者としてできることは、客観的な視点を持ち、正確な知識や情報を提供し、あくまで公正であること。それに尽きると思います。明日がどちらに転ぶかは、なるようにしかならないのかなと、最近はそのようにしています。